

総合人間学と私
人間とは何か その総合的認識をもとめて
Synthetic Anthropology and My Study
Inquiring Integral knowledge on Human Beings

堀尾 輝久

HORIO, Teruhisa

1 現在、諸学問の専門分化が進むなかで、逆に総合化への要求も強まっている

人間諸学に関しても事情は同様である。哲学、文学の専門分化のなかで成立する、心理学、教育学、社会学、文化人類学、等の人間諸科学は、それぞれが人間研究を、固有の研究対象と方法にもとづいて進めていくなかで、専門的個別研究は進んだが、人間研究の初心を忘れるという事態のなかで、その反省も広がり総合化への指向も強まってきている。社会科学においても社会と人間、法と人間、経済と人間、政治と人間といった本来の探求関心が希薄化するなかで、その学問のありかたが問い直されている。このような反省（reflexion）は人文諸科学、社会諸科学にとどまらず、自然と人間を問う自然諸科学をも含んでの総合人間学への指向として現れてきた。

その期待を担って、6年前、総合人間学会が発足した。その設立趣意書（アピール）には「現代の人類は、高度の物質文明を発展させながら、向かうべき目標を見失い、自らつくり出したカオスの中に、当てもなく、さまよっている感がある。」とあり、「倫理なきマンモニズム（拝金主義）」のもと「エコシステムの破壊」がすすみ、「大量破壊兵器」を背景に「危険な資源競争」をまねき、「グローバルな社会的緊張や混乱」をもたらしており、世界の

かえる「閉塞状況」への根源的な取り組みが求められている。この「今日のグローバルな難局に対処するためには、人間というものへの真摯な自己認識と反省が不可欠」だと述べ、「“汝自らを知れ”という古代ギリシャの神殿の宣託は、今日にあつては、総合的な人間学の要請となっていると、わたしどもは考える」と述べている。

私はこの趣旨に賛同し、直ぐに参加したのだった。

総合を言うは易しい。しかしどうすればそれは可能なのか。

総合人間学会はアンブレラ学会ではない。

専門を通さない総合はありうるか。

総合人間学の固有の方法はあるのか。

当面は多様な方法による多様な総合人間研究の模索が続けられよう。

とりあえず、まずは会員各人の課題意識や方法意識を出し合うことであろう。

2 私の問題関心の推移

1945年8月15日は中学1年生。戦争で父を失い、いっばしの軍国少年だった私の迷いながらの青年時代は始まる。新憲法と新教育の時代は講和をめぐる

政治の季節であり、マルクス主義と実存主義は学生たちの共通教養であった。

そんな時代を東京大学文1に入った私は寮生活と運動部（馬術部）を中心に Sturm und Drang の教養学部生活を過ごし、法学部は政治コースを選んだ私は法律学にはなじめず、政治思想史（丸山真男ゼミ）と法哲学（尾高朝雄ゼミ）に救われた思いで学部生活を終えた。丸山ゼミのテーマは「日本のナショナリズムとファシズム」、尾高ゼミではカントの永久平和論の英訳本がテキストだった。大教室の講義にはなじめず、喫茶店と図書館で過ごした。サルトルよりもカミュに、ハイデggerではなくヤスパースに惹かれていた。自分のなかのニヒリズムとの闘いこそが課題だと日記に書きつけたのもその頃だった。

哲学や教育に関心を持ち、人間と向き合った研究をしたいと考えていた私は学部後の進路に迷い教育哲学の勝田守一先生を訪ね、勝田ゼミを中心に大学院生活を過ごすことになる。

日本の近代、ヨーロッパの近代、そしてあの大戦争と日本の戦後改革とは何だったのか、日本人はどう変わったのか、変わらなかったのか。そして自分はどう生きればよいのか。人間への関心、教育への批判的関心、人間が成長発達するとはどういうことか、人間と教育と政治への関心——ルソーや若きマルクスに夢中になり、ピアジェやワロンを通して発達への関心を深めたのもこの頃だった。

修士論文では大正末期から昭和初期の時代、大正民本主義からなぜファシズムへ変わっていったのかを、再びそうなるてはならないという問題意識で、〈大衆社会化状況〉を介しての教育と政治の視点から分析した（後に『天皇制と教育』所収）。

博士論文は『現代教育の思想と構造』と題して古

典近代から19世紀末以降の社会の構造転換を通しての教育思想・イデオロギーの展開とその機能の分析を試みた。これは近現代教育思想の社会思想史的研究だったと言えよう（現在その英訳が進んでいる）。

幸運にも東大の教師になった後は教養学部では一般教養としての教育学、本郷では教育思想（ゼミ）と教育学概論を担当した。在外研究ではパリ大学（ソルボンヌ、第5）で新しい教育学研究室を主催するM.ドベス先生（青年心理学、発達教育学）のもとで「発達と教育」の視点からの教育学構想を固めた。それは少し前に出た勝田先生の『能力と発達と学習』（これは勝田教育学とも言うべき著作）とも響き合うものだった。

勝田のこの本は勝田著作集第6巻『人間の科学としての教育学』に収められている。京都大学で哲学を学び、シェリングの学問論を翻訳している勝田は戦後の東大教育学部で、現実の子どもと教育の問題と切り結ぶ教育学の創造を目指し、教育学の学問的自立と人間学（科学）としての教育学への道の開拓者であった。私は後進の一人としてこの道を引き継ぎ、「総合的人間の学としての教育学」を教育概論の軸として構想してきた。私の『人間形成と教育—発達教育学への道』（岩波書店1990）はその素描だと言ってよい。

この著作で私は「教育学は総合的人間研究を目指すものであり、総合人間学は教育〔人間発達〕の視点なしには語れない」と書いてきた。

総合人間学の学会ができると聞いて、躊躇なく会員になったのだった。

3 学問史に学ぶ

人間とは何か。何処より来たり何処へ去り行くの

か。何に苦しみ、何をよりどころに生きるのか。これは先人たちが問い続けてきたことではなかったか。その思索に学ばず、その探求を引き継ぐことなしに前には進めまい。私たちはその知恵からも幻想からも学ぶのだ。それは私たちの知の総合の方法を鍛えることにもなる。

1) 古代知の再生としてのルネッサンス、そしてウマニスムス (Erasmus, Rabelais, Montaigne) から百科全書 (artes liberales, panpaideia, encyclos paideia, Encyclopedie)

2) 17-18 世紀の学問のもつ人間理解の可能性
Bacon, Comenius, Locke, Hume, Smith, Diderot, Rousseau, Condorcet, Humboldt, Kant

これら先人たちは今日の専門諸科学の学説史のなかでその始祖的な位置を占めると同時に、その専門学には収まりきれない人間理解の広がりや深さをもつ、いわば知の巨人たちであったと言える。

3) 19 世紀、資本主義の発展と市民社会の矛盾の深まり行くなかで、歴史と社会に規定された人間への関心、そして人間の内面への関心も深まっていく。

思いつくままに挙げれば、Hegel, Feuerbach, Marx, Darwin, Nietzsche, Freud, Dewey, Weber, Durkheim, Bergson, Cassirer, Ushinsky, Vygotsky, Wallon, Piaget, Sartre, Merleau-Ponty, Levi-Strauss, Bourdieu, Edgar Morin…

自然科学者の Lanjevin や Huxley から学ぶことは多い。我が国の知の先達からの遺産も忘れてはなるまい。私が師と仰ぐ丸山真男、勝田守一、上原専祿の3先生はいずれも人間洞察の人だったと今にして思う。

私たちは人間諸科学そして広い意味での哲学者たちの知恵からそしてその幻想からも学び取り、人間と社会と自然についての豊かな実証的知見を通して

の総合を目指さなければならない。

これら総合人間学の先駆者たちの課題意識と方法的自覚を対象化する共同研究が求められている。

4) その一例としてルソーをとりあげる。

私自身、教育思想の研究者としてエミールは勿論、学問芸術論、不平等起源論、社会契約論、そして告白を繰り返し読んできた。人間不平等の起源を問い、学問芸術の墮落した現状を批判するルソーは子どもと人間の視点から教育のあり方を問い、社会契約論を通して新しい政治と国家のありかたを提示した。子どもの発見の書といわれるエミールは子ども期、青年期の発見を通しての人間の再発見の書であり、共和国を支える市民の形成の書である。

ルソーはこれらの著作を通して自然と人間、神と人間、おとなと子ども、人間と市民の関係を問い、感性和理性、自己と他者、自己愛と共苦の愛の関係を洞察し、人間理解を深めてきた。このルソーの思索の跡は総合人間学的研究の先駆だと言ってよい。

昨年は生誕 300 年、エミール 250 年にあたり、フランスでも日本でも改めてルソーへの関心が高まった。パリでは、パンテオンで、芸術家、音楽家としての活動に焦点を当てた展覧会が関心を集めていた。言葉と音楽という面白いテーマに気づかせてもくれた。

私たちの学会が「総合的人間研究の先駆者たち」というテーマでの研究発表が継続的に行われることを期待して、今年の学会の自由発表でルソーについて報告したのでより詳しくはそちらを参照していただきたい（付論参照）。

4 総合人間学的視点からの現代認識

1) 総合人間学会が取り組むテーマは多様だが、これまでの研究大会での課題設定やシンポジウムのテ

ーマは学会運営委員会と大会実行委員会での論議を経て決められてきており、そこに問題意識の集約を見ることができる。「人間はどこにいくのか」(第1回)「自然と人間の破壊に抗して」(第2回)「科学技術を人間学から問う」(第3回)「戦争を総合人間学から考える」(第4回)「人間にとっての都市と農村」(第5回)「進化論と平和の人間学的考察」(第6回)「3.11以後の科学技術と自然観」(第7回)となっており、今年は前回を受けて「3.11と人間の絆」であった。いずれの回のシンポジウムも、自然、人文、社会領域からの論者が参加し、多面的に、しかし人間とは何かの問いを深めるものであった。

私は戦争と平和の問題の総合人間学的研究(第4回、第6回)では実行委員としてプログラミングに参加し司会を務めたのだが、それらの問題を通して、現代という時代をどう認識するかという課題に総合人間学的に取り組まねばならないのではないかという思いを強くした(堀尾「戦争と教育 そして平和へ」『戦争を総合人間学から考える』総合人間学会編、学文社、2010)。

2) そもそも現代という時期区分は何時からを言うのか。それはポストモダンのことなのか。

私はこれまで近代以降の歴史を市民社会に対応する古典近代、帝国主義に対応する近代後期、そして1945年を画期とする現代と大きく3区分して思想史研究をしてきた。

なぜ1945年なのか。いうまでもなく第2次世界大戦、そしてアジア、太平洋戦争の終結の年であり、世界的にも日本にとっても、そして自分史にとっても、大転回の時代の始まりだったと言える。

戦争から平和へ、帝国主義の終焉と植民地の独立へ、解放と自由と民主主義が新しい理念となった。国連憲章、世界人権宣言、そして日本国憲法も誕生

した。全人類の生存と平和と人権の理念が高らかに掲げられたのだった。

全体戦争は核爆弾をもって終わり、核時代への始まりと米ソ2つの世界の緊張の始まりをつげるものでもあった。それはまた、こんど戦争になれば、人類が滅亡するという危機意識を高め、繰り返される核実験と産業廃棄物による環境汚染、破壊は地球環境認識を高め、この地球上に存在するすべてのもの——自然もひとも——が運命的な絆で結ばれているという共生の感覚と思想が広がり共有されていく時代のはじまり(その入り口の時代)であった〔それを私は地球時代というのだが〕。

それは新しい世界史認識の出発でもあった。上原専禄はこう述べていた。

『人類』は第2次世界大戦から一つの共通の問題を意識するようになった。もっと正確にいうと一つのまとまっている集団的存在としての『人類』というものがはじめから存在していて、その人類が第2次世界大戦から1つの問題を汲みとった、というような順序ではなく、逆に、第2次世界大戦から一つの問題が共通の問題として汲み取られることによって、『人類』というものが一つのまとまった集団的存在として同時に自覚されるようになった、というべきでしょう。」(『世界の見方』理論社、1962)

人類は戦争の惨禍の共通認識と平和への願いを共有していることの自覚を通して〔人類〕を発見したのである。

人間の発見から人類の発見へ、国民世界から民族の独立を介しての人類世界へ。〔戦争の悪魔性〕の認識と平和への希求。そして子どもの発見から未来

世代の発見へ。平和的生存の権利は平和の文化への権利を含んで深められていく。

この間、地球と宇宙の科学は飛躍的に発展し、地球を回る人工衛星とIT情報は日常の生活感覚にも変化をもたらしている。

重ねて3.11は地球が生きて動いていることを目の当たりに示し、原発から自然エネルギーへの転換を決定づけたものであった。

私たちの地球時代感覚は地球認識の深まりによって支えられ、地球時代の価値観は平和、人権、環境、共生の思想を深め、自然と人間、個別と普遍、自由と寛容の関係を問い直すことをもめている。

【注】私は地球時代（1945年から現在まで）を1. 理念の時代 2. 米ソ冷戦時代 3. ソ連崩壊とグローバル化の時代 4. 地域の多元化と平和の文化の時代の4つの区分を考えている。現在は3から4への過渡期。拙著『未来をつくる君たちへ地球時代をどう生きるか』（清流出版、2011）参照。3）昨年10月、Tunisiaでの学会（MESCE）でkey-note speechを求められ、「地球時代の価値と教育の課題——平和、人権、共生」と題して報告した。原題は“Valeurs et enjeux de l’éducation à l’ère planétaire-Paix, droits de l’homme, kyosei (vivre ensemble)”。フランス語での講演は久しぶりのことだった。学会の正式名は「地中海地域の比較教育学会」というのだが、地中海地域という言葉の持つ世界史的意味について学び直すよい機会でもあった。ブローデルの名著『地中海』も読み直した。「アラブの春」の起点としてのチュニジアへの関心もあっての参加であった。

私は地球時代の定義、その始まりとしての1945年、そしてあの大戦争の終結と国連憲章、世界人権宣言に始まる新しい世界秩序へ向けての動きについ

て述べ、日本国憲法とりわけ前文、9条の日本についての意義と世界史的意義を強調した。国際軍縮教育会議の流れや、バンドン非同盟会議（1955）とその後についても話した。構造的暴力論を契機に、平和の文化への国際的な意識の高まりについてもふれた。

人権については世界人権宣言から人権規約（条約）へ、そして女性、障害者、子どもの権利条約への発展の意味について述べ、とりわけ子どもの権利についてはそれを実現するための国連子どもの権利委員会CRCの活動と各国政府およびNGOの動きの比較研究の重要性を日本の場合を例示して提起した。

とくに共生の思想については時間を割いた。私はまずそれをkyoseiと書き、vivre ensemble, live together, convivialityあるいはsymbiosisといえるが共生は人と人の関係だけではなく、人間と自然の関係が強く意識されている言葉であり、アニミズム的な、あるいは仏教的な言葉であること、人間性とはhuman natureつまりは人間をつらぬく自然であり、生者は死者と共生していると考えられてきてこと、とりわけ3.11以後にはこのような感覚が共鳴され、共有されてきていることも話した。

文化の多様性に関わっては、個別性と普遍性の関係の捉え直しが求められているとして、これが普遍であるとはだれも言うことはできないが、それは相対主義に組することではないこと、個別性のなかを貫く普遍的なものへと開かれていくものへの存在感覚が大事ではないかと述べ、民族衣装をまとして、堂々と発言するアフリカの人たちに感じる尊厳と尊敬の念はアフリカのなものへの関心と敬意、民族的アイデンティティへのrespect、そして、その人個人への尊敬の念であると同時にそれらを通しての人間に対する尊厳を感じているのではないかと。あるい

はノーベル文学賞の受賞者大江健三郎の文学の普遍性は、彼が常に回帰する故郷松山の森であり、障害を持って生まれた息子光君との共生の体験のなかから生まれ、ヒロシマと沖縄を通して発信される言葉のなかにあるのではないか。抑圧されたものに共通の人間としての感情 (*le sentiment humain*) とそれをつなぐ開かれた理性 (*la raison ouverte et universelle*) の働きが個別性と普遍性をつなぐものではないかと話した。

拡がる世界の格差、貧困そして環境問題も、地球上のすべての人と人、そして人間と自然の共生の問題である。食欲な経済成長主義は格差を拡げ、自然を破壊し続けてきた。ローマクラブそして Meadows らによって成長の限界が指摘され (1972) て久しいが、今や限界を超えたと警告され (Meadows, 2012), 脱成長 (*décroissance*) が主張されるにいたっている (Latouche, 2012)。グローバリゼーションは世界に格差をひろげたが、豊かな国のなかにも格差を拡げ、昨年アメリカでは「我々は 99 パーセントだ」という抗議と連帯の運動が広がった。

globalisation は地球時代の negative な現象であり、それをいかに克服するかこそが、現在の、最大の課題だと言える。

グローバリゼーションに国境は無く、多国籍金融資本が世界を支配する。食欲で横暴な資本の活動を掣肘するためにはナショナルインタレストの視点をつなぐ国際的連帯が求められている。それを globalism に対抗する新しい inter-nationalism と言えるのではないか。

さらに成長神話が問い直されるなかで、豊かさとは何か、人間にとっての幸せとは何かが問い直されているのではないか。そこで私は日本に古くからある清貧の思想についてふれた。「清貧の生き方」を

Vivre honnête, juste, et pauvre と言ったのだがどこまで理解されたかは分からない。Ascetism とどう違うのかという質問も受けた。これから深めたい課題だと思う。

スリーマイル、チェルノブイリ、フクシマと原発事故の続くなかで、安全神話は崩れ、No Nukes! の声も広がっている。なぜ反対か。私はフクシマについて話し、事故の巨大さ、使用済み核燃料の処理方法が未解決、加えて地震と津波の日本列島はそもそも立地条件を欠いていると反対理由を述べたのだった。

さらに核抑止力神話も崩壊していることを述べヒロシマ、ナガサキを経験し、9 条を持つ日本で、軍事基地の集中する沖縄についてふれ、成長神話、安全神話、核抑止力神話という「現代の神話」から脱却するための思想と国内的、国際的戦略、そして新しい連帯の思想が求められていること、その軸となるものは弱いもの、抑圧されているものの人間的感情でありそれを結びつける開かれた理性ではないかと語った。

イタリアの友人 Pampanini 氏が、彼は私のフランス語でのスピーチを英語に通訳してくれていたのだが、通訳の役を超えて、いまイタリアのシシリー島で進められようとしているアメリカのスーパーレーダー基地は地中海地域全体の脅威となる、その反対運動を拡げたいと語ってくれた。

最後に、私の好きなフランスのプロテストシンガーとしてよく知られている Jean Ferrat の Camarad という歌、これは 1968 年のプラハの春を武力で押しつぶしたソ連に対する、Camarad の裏切りに対する痛烈な抗議の歌なのだがこれを紹介し、もう 1 曲 La montagne をカルタゴの山の秋がジャスミンの春と同じように美しくあれと変えて歌ったのだった。

参加者にハミングが広がったこともうれしいことだった。

地球時代にふさわしい世界を！ これを最後の言葉とした。

振り返ってみれば、この報告を更に深めることも

総合的人間学の課題の一つであろう。

【なお付論として本大会の個別研究で発表したルソー論を付記します。】

総合人間学（総合的人間研究）の先駆者としてのルソー

(1) 総合人間学の対象と方法を考える基礎作業の一つとして、学問史を通して総合人間学的学問意識の所在とその態様を探ることが必要である。その作業の一つとして、今回はルソーをとりあげる。

昨年（2012）はルソー生誕 300 年、エミールと社会契約論 250 年、フランスでも日本でも多様な視点からのルソー再考の年となった。パリのパンテオンではルソーの芸術活動を中心とする展覧会が開かれ、日本では大型の日仏ルソーシンポジウムが行われ、この 1 月には、B. Bernardi 氏を招いての連続講演、研究会がもたれた。永見文雄氏の力作『ジャン＝ジャック・ルソー』も出版された。ルソーへの関心は現代という時代のアクチュアリティ（現実性）と重ねての、ルソー再発見への旅でもある。

(2) 当時の学問・芸術批判から始まるルソーの人間への関心は、自己と他者、感情と理性、知と徳、言葉と音楽、自尊心と自己愛、憐憫と共苦、個と社会、子どもとおとな、人間と市民、自由と平等、一般意志と専制、共和国と民主主義、戦争と平和、祖国と人類、信仰と市民宗教など、多面的、重層的、複合的であり、いずれもその時代の課題、あるいは先取りした課題でもある。レヴィ＝ストロースが「人間諸学の創始者（fondateur des sciences de

l' homme)」と称した所以であろう。

因に、フランスでは anthropologie は人類の実証学的研究として固有の意味を持ち研究も蓄積されてきた。レヴィ＝ストロースはその代表格であるが、その彼が science de l' homme という表現を使って、ルソーをその創始者と讃えていることにも注目しておきたい。彼自身その膨大な人類学研究

(anthropologie) を通して人間の科学 (science de l' homme) を目指していたのだと言えるのではなかろうか。付言すれば、わが総合人間学（会）の英語表記は synthetic anthropology であるが、そのフランス語表記としては la science de l' homme integrale がよいのではというのが私見である。

(3) さて、私たちはルソーがこれらの問題と格闘する姿とともに、現代的課題意識を介して批判的に読み直すことが求められる。ルソーを介して、私たちの人間理解の枠組みと内容も問い直されてこよう。

従来のルソー研究は、概して言えば、学問の分化と対応して、文学者は『告白』や『新エロイズ』を、社会学者は『不平等起源論』を、政治学者は『社会契約論』を、教育研究者は『エミール』をとりあげて、それぞれの学説史のなかに位置づけるこ

とで、とりあえずは済まされていた。しかし、それではルソーの全体像は見えないし、彼の捉えた人間の姿も部分化されてしか見えてこない。ルソーは人間なるものをどう捉えていたのか。どう捉えようとしていたのか。こう問うことこそが総合人間学的問いと言えるのだろう。

とはいえ、上記の問題のすべてを論じることが総合ではない。重層的と言ってもなにをどう重ねるかによって、その姿も違って見える。そこで、とりあえずは、それぞれの専門的視点からのルソー像を提起し、他領域からのルソー研究に学びながら、それを総合的視点から批判的に捉え直し、みずからの専門の枠を抜け、ときにそれを解体し作り直すことが求められよう。

(4) 教育思想研究者としての私は、ここで、子どもとおとな、感情と理性、人間と市民、教育と政治の問題を重ねながら、その人間観を探り、人間研究の方法について考えたい。起源と生成、変化と理念(本質)を問う思考方法からも学びたい。

その時代と格闘したルソー。「エミール」に革命の足音が聞こえると書いたルソーの問題意識に、「不平等起源論」と「社会契約論」を重ねて読めば、〈自然人としての人間はいまや自由を失い、不平等な社会にあって、何を求め、どう生きるのか、専制のもとで腐敗堕落した社会と学芸をどう変えればよいのか〉にあったと言えよう。その思索は必然的に未来を担う子どもたちの人間としての教育と人民が主体となる共和国の模索へとむかう。エミールと社会契約論がともに 1762 年に出版されたのは偶然ではない。

『エミール』の冒頭近くにはこう書かれている。人は子どもという者を知らない。「小さな大人」と

思っている。しかし子どもは子どもなのだと。

その人間は弱いものとして生まれる。その弱さにこそしなやかな成長発達の可能性が宿っている。子どもは大人とは違う、発達の可能態である。発達には段階があり順序がある。

「自然は子どもが大人になる前に子どもであることを望んでいる。この順序をひっくり返そうとすると、成熟してもいない、味わいもない、すぐに腐ってしまう速成の果実を結ばせることになる。私たちは若い博士と古いこんだ子どもをあたえられることになる。」(上 125 頁、今野一雄訳、岩波文庫)

「教育という仕事は、時をかせぐために時を無駄にすることを心得ておかねばならない。」(上 236 頁) 大人たちは子どもの理性に訴える教育を強調する。しかし理性は豊かな感情にささえられて発達する。

「人間のあらゆる能力のなかで、いわば他のあらゆる能力を複合したものに他ならない理性は、最も困難な道を通して、そして最も遅く発達するものである。……すぐれた教育の傑作は、理性的な人間をつくりあげることだ。それなのに人は理性によって子どもを教育しようとしている。それは終わりにあるものから始めることだ。つくらなければならないものを道具に使うことだ。」(上 123 頁)。

子どもの発達と教育の本質的な関係を見事に言い当てた言説である。ルソーをパトスの人と捉えることの一面性もこれで分ろう。人間発達の過程を動的に弁証法的に捉えるその思考方法からこそ学びたいと思う。

大人とは違う子どもの発見とは子ども期(enfance)の発見であった。第 1 編から第 3 編の主題だと言える。

子どもはやがて第 2 の誕生ともいうべき青年期(adolescence)をむかえ、異性への愛を知る。être

moral となる。宗教への思索も深める。異国を旅し世界を知り、共和国を担う市民 (citoyen) になる。これが第4編と第5編の主題である。

(5)『エミール』は子どもの発見の書にとどまらず、青年期の発見の書であり、人間の再発見の書、そして人間と市民 (公民) の関係を問う書でもあるのである。

『エミール』で祖国 (patrie) の失 (な) いところに市民はいないとして、まずは人間の教育から始めようとしたルソーが、『社会契約論』で展開する共和国にあつては市民なくして人間はいないという。その共和国とはなになのか、一般意思を具現する共和国とはいかなるものなのか、res publica と demos cratos と volonté générale の関係は？ 共和国は新たな祖国なのか。そこでも人間の教育が先行するのではないか。その最後の課題が市民としての教育であろう。教育と政治、人権と主権、このコンテキストのなかでは、個別意思と一般意思はどういう関係になるのか。「社会契約はあらゆる市民社会の基礎である」としその本質は「自分たちの力のいっさいを、一般意思の最高指揮にゆだねる、そして、みんなで一緒に、全体の分割できない一部としての各自の部分を受けとる」(下232頁)。実はこれはエミール第5編からのものだが、この部分は、彼の自注にあるように『社会契約論』からの要約的抜粋なのだ。しかし、人間と市民と人民の関係は説得的であろうか？ 「圧政と戦争こそ人類のもっとも大きな災害だ」(下243頁)という彼の平和論の具体的な展開は？

これらの大問題にルソーが十分に答えているわけではない。矛盾する言説も少なくない。

これらはいずれも現代の私たちが問われている問

題である。その意味では、ルソーは人間諸学の創始者 (fondateur) というよりも、問題提起者であり挑戦者 (homme de défi, provocateur) であったと言えるべきであろう。

(6) たしかにルソーは若い頃から論争好きであったが、それは深い人間理解からくる批判の精神に由来するものであり、それゆえに権力に迫られる身にもなった。現代のルソー研究者 B. Viard 氏が「精神分析家 psychanalyste としてのルソー」の人間理解を論じているのも頷ける。(Viard 氏の中大での講演 2013. 10. 24)

ルソーはまた音楽家であり、百科全書に四百を超える音楽関係項目を書き、音楽辞典も書いている。まさしく感性の人でもあった。オペラをめぐってラモーンと音楽論争もしている。彼はまた、言葉と音楽 (メロデー) の起源を問う比較動物学的探求者でもあった。やがて百科全書派とも決別する (パンテオンでのルソー展 2012 年 9 月の展示に詳しい)。

論争に疲れて、森のなかの散歩を楽しむ孤独な夢想者 (promeneur) でもあった。

付記、この報告の後、ルソー生誕三百年に因んでの二つの著書が出版された。; 永見, 三浦, 川出編

『ルソーと近代』(国際シンポ) 風行社 2014, ブリュウノー ベルナルデイ著, 三浦信孝編『ジャン=ジャック・ルソーの政治哲学』勁草書房 2014

堀尾 輝久 (東京大学名誉教授)